

タイトル：2025 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 26 回）

日時：2025 年 12 月 19 日（金）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「11 世紀アンダルスにおけるキリスト教徒の婚姻—アラビア語カノンからみるキリスト教徒・ムスリム関係」

北海道大学大学院博士後期課程

高橋稜央

報告タイトル：「11 世紀アンダルスにおけるキリスト教徒の婚姻——アラビア語カノンからみるキリスト教徒・ムスリム関係——」

本セミナーを知ったきっかけは、学部 4 年生の時に所属研究室の先輩に教えてもらったことであつた。その年の教育セミナーにオブザーバーとして参加した私は、そこでの修士課程の方々の研究発表に既に圧倒されており、研究セミナーで博士論文について報告することなど最早想像すらできていなかった。この度自分が報告することとなりそのことを思い出し、年月の経過に驚いたと同時に、初心を思い出して身の引き締まる思いだつた。

私の博士論文のテーマは「8～11 世紀におけるアンダルスのキリスト教徒」である。これはムスリムとキリスト教徒の双方がアラビア語で著した法学史料を用いて、当時のイスラーム・キリスト教両方の宗教エリート達が、互いの宗教とその信徒についてそれぞれ如何なる懸念を持ち、自分の宗教の信徒達を守るためにどのような対策を講じたのかを分析する事で、アンダルスにおける宗教間関係の一端を明らかにする試みである。報告内容はそのうちの一章分にあたる、婚姻にまつわる諸問題について、アラビア語教会法とその引用元であるラテン語教会法を比較するものであつた。AA 研の先生方や受講生の殆どは私とはテーマが大きく異なっていたにも拘らず、細かい史料の内容から報告全体の論の構成や報告資料の形式に至るまで、非常に重要な指摘を幾つも受けることができた。普段は専門地域を同じくする先生のもとで学んでいる自分には、中東やイスラームについて研究しているが専門が異なる多くの研究者と 1 時間もの間議論できる場は非常に貴重であつた。特に、アンダルスのキリスト教徒を中東や中央アジアの被征服先住民と同じレベルで考えようとする私にとっては、他地域の専門家に自分の報告を聞いてもらうということの重要度は非常に高い。これから論文化し、さらにそれを博士論文に組み込むという段階に進んでいくために、この時間は必要不可欠なものであつた。

また、博士論文を準備する近い世代の仲間を得たことも大きな収穫であつた。地方の大学の在籍者は博士課程に所属する同世代になかなか出会うことができない。しかし、こういった場で必死に研究を進めている仲間と互いの研究や私生活、今後の展望などについて話すことで、不安が解消されたり、自分の研究に対して改めて真摯に向き合うことができた。こういった繋がりは、博士課程が修了した先も長く、大切なものになるのだろうと思う。

本セミナーに対して何か指摘しうる点があるとすれば、質疑についてである。自分も含め、最初の方の報告では受講生からの質疑が少なかつた。単なる受講生自身の気後れも大きいとは思ふが、一旦受講生からの質問を受け付け、その後フロアに開くという形をとるとそこも少し改善されるかもしれない。

全体を通して、多忙な AA 研のスタッフの皆様がこのセミナーに丁寧に取り組んでくださったことにより、事務手続きを含めて非常にスムーズかつ内容の充実したセミナーになった。事務の千葉さん、AA 研所員の先生方、本当にお世話になりました。ありがとうございました。